パネルディスカッション | 内科

2026年11月20日(金) 14:00 ~ 15:30 | 第6会場（1F 会議室103）

パネルディスカッション４　大腸がんにおけるプレシジョンメディスンの現状と課題

司会：田村 孝雄（近畿大学奈良病院腫瘍内科）、杉本 直俊（大阪国際がんセンター遺伝子診療部）

[PD4-3] 大腸癌転移再発根治切除症例における予後予測因子としてのDNAメチル化マーカーの有用性

*藤﨑 隆[1]、市川 峻太[1]、岩井 貴寛[1]、小林 清洋[1]、濱田 篤彦[1]、安藤 祐二[1]、村井 勇太[1]、幸地 彩貴[1]、十朱 美幸[1]、仲川 裕喜[1]、高橋 宏光[1]、井 祐樹[1]、河口 恵[1]、百瀬 裕隆[1]、土谷 祐樹[1]、塚本 亮一[1]、盧 尚志[1]、本庄 薫平[1]、冨木 裕一[1]、杉本 起一[1] (1. 順天堂大学医学部附属順天堂医院　下部消化管外科)

【背景】大腸癌治療ガイドライン医師用2024年版では，転移再発病変が存在する大腸癌症例は局在が明らかで根治切除が可能と考えられる場合は外科的治療が推奨されている．しかし，転移再発巣では肉眼的根治切除に至った症例でも術後再発リスクは高く，外科的切除が患者の長期予後にどの程度寄与するかについては，依然として議論の余地がある．一方，DNAメチル化は多くの癌腫において早期発見や術後再発予測，治療効果のモニタリングにおける有用性について多くの報告がなされてきている．
【目的】大腸癌原発巣組織におけるDNAメチル化の評価が転移再発巣切除を行った大腸癌症例の予後予測因子になりうるかについて検討した．
【方法】2011年～2018年に当院で原発巣と転移再発巣に対して肉眼的根治切除を施行した大腸癌(計64例)を対象とし，原発巣癌組織における相対的DNAメチル化レベル(Relative methylation value：RMV)を測定した． 対象とした遺伝子はCHFR，SOX11，CDO1でRMVの測定を行った．RMVの測定は癌組織からDNAを抽出後にbisulfite処理を行い，定量的メチル化特異的PCR(qPCR)で行った．RMVのカットオフ値については，再発の有無をエンドポイントとしたROC解析を用いて決定し，高値群と低値群の2群に分け，Kaplan–Meier法(log-rank検定)を用いて無再発生存率(RFS)について評価を行った．
【結果】3つの遺伝子のうち，CHFR，SOX11ではRFSに有意な相関は認めなかった．一方，CDO1に関しては，CDO1-RMV高値群(n=55)の5年無再発生存率は8.2%で，低値群（n=9）の60.3%と比較すると有意に不良であった（p=0.046）．
【考察】CDO1遺伝子は細胞内システイン代謝に関与する遺伝子であるが，そのDNAメチル化は胃癌や膵癌における予後に関与していることが報告されている．本検討結果からも，大腸癌の転移再発巣に対する肉眼的根治切除症例においても，原発巣のDNAメチル化を評価することは，大腸癌におけるプレシジョンメディスンを推進する上で，有用なバイオ―マーカーになり得ることが示唆された．

©一般社団法人 日本大腸肛門病学会